

請に對し仏の応答し玉える所の四法成就は之れ法華一經の重演にして自他兩行に汎る寔に巧妙を極められたものであった。即ち四法とは「一者為諸仏護念二者恒諸德本三者入正定聚四者發救一切衆生之心」である。釈尊は此の四法の要義に由つて法華經本迹兩門の事理に汎り其の修行を講説せられた。即ち末法に於て「護持此經」の確信を持てば四法は必ず成就せん、而已ならず本迹開顯すれば四法は又迹門自行門の四安樂行にも対応し、又迹門化他門なる衣座室の三軌にも対応し、又正宗分の四仏知見にも対応す。

要は戒定慧三学を根底とする末法法華經の修行法である所の「四法成就」は、之れ「護持此經」に基く事明かなり、然し乍對告主なる普賢菩薩は之れ迹化の菩薩なり、四法が「迹面本裏」の教相なる事は之れ自明の理なり、若し夫れ「本面迹裏」の本門の実義に至りては上行菩薩の出現を待ちて顯發せらる可きである。是れ聖祖が佐渡に於て寿量品の文底秘沈の五字を以て一代聖教の真髓とし、釈尊出世の本懷と説き玉う所以である。聖祖は此の五字より三秘を開出し「更持妙法」の信念これ果法修行の方軌也と定む。即これ戒定慧三学に配する本門の三大秘法なり、今三秘と四法を對比せば本門の本尊は寿量顯本の上に立つ本尊にして寿量品文上の釈尊は其儘無始無終の無作の三身即一の本覺仏にして三世十方の仏を統合して諸仏の中心主軸となり法名七字の名号を以て吾等の皈依の對象となり玉う。今、四法の諸仏を開顯すれば「本仏護念」となる。

本門の題目を以て四法の「植諸德本」を開顯すれば、七字の題

目は之れ本仏の妙智にして仏智を以て一切諸法を開顯すれば、悉く価値的に功德化し皆な妙法の妙用となる。又この仏智を本仏の因行果徳の二法を具して受持の者をして其の功德を授与せしむ故に四法の諸の德本はこれ本門の題目なり、本門の戒壇は之れ本仏の妙相なり、即ち吾等妙法を信得し身口意三業に受持すれば、仏力、法力、信力三力冥合し任運に三身の果徳を享受し即身成仏の大果に入る事を得ん。此れを吾等行者は異体同心を以て化他の願業に徹し、四海歸妙本国土妙を實現せんと拝す可きなり、四法の「入正定聚」並に「發救一切衆生之心」を即ち本門の戒壇なり、然りと雖已上の法義は妙法の願徳門の所証なり、若し夫れ其の遮障門に入むにを懺悔滅罪と報恩謝徳の生活なかる可からず、之れ現代吾等の最も反省す可き所なりと信ず。

日蓮聖人の宗教より見たる

## 大塩中齋の儒教哲学

有 光 友 逸

陽明学者大塩平八郎中齋及び先祖以来の菩提寺に住職している私は、その事蹟の研究と顕彰を行っているが、本化別頭の教学上に観点を置いて、中齋の儒教哲学を見てくると、その思想と行動について種々の特徴に気付くのである。

中斉の儒教哲学は、王陽明の学統を奉じたが、彼はそれに縛られることなく、独自の体系を打ち立てた。東洋哲学上に於ける実在の問題たる天・太極・無・無極・空・空虚・中・良知等を「太虚」を以て総合統一し、認識の問題たる良心・道心・知・良知等を「良知」を以て総合統一し、道德の問題たる五倫・五常等を「孝」を以て総合統一し、更にこの三綱をば一貫して一体なるものとし「太虚」に帰一している。この点に於て、中斉は東洋哲学思想の総合統一を試みた偉大なる哲学者であると言ふことが出来るのである。

しかし彼の四十五年の生涯に於て、仏教研究に手を染めるとまがなかつた為に、本化教学の広大深淵なるより見れば、隔靴搔痒の感なきにしもあらず。

太虚の実在論は、大宇宙の聖なる法格体の実在を語るが、久遠本仏の聖なる人格体の実在については未だ説き得ない。良知の認識論に於て、八識相当の心識論であり、未だ九識の仏性を認めない。故に信念唱題によって主客一如の境に至る、智即信の認識ではない。道德論は孝を至上とするから、我祖の説く主帥親上位者に対する四恩報謝の宇宙的道德論には及び得ないわけである。

知行合一の学風についても、その知は個人の心を中心とする觀念観法であるから、我祖の一閭浮提第一の御本尊を信ずるという前提のある、行学二道とは異なるものがある。

中斉は、腐敗せる幕政に対する覚醒運動を起したが、これは身を殺して仁をなす義挙である。彼が先祖代々日蓮宗を奉ずる家に

生れて、日蓮聖人の国家諫曉についての厳しい折伏伝導を慕い、心中に何か共鳴するものを感じていたに相違ない。

若し彼が余命を得て、日蓮聖人の宗教の真髓に触れて、その思想が円熟していたのならば、東洋哲学史上に於ける彼の価値は、更に高揚さるべきものとなっていたであろう。惜むべきである。

私の中斉研究の目的とするところは、これを一つの方法として、より偉大なる日蓮聖人を、世人に正しく知らしめたい事にある。未だ研究途上であるが、母校創立五十周年記念大会を期にその一端を発表したものである。（大会発表の稿は、信人三十八年六月号に掲載したものの、抜刷があるので、御希望者には送ります大阪市北区末広町三五 成正寺 宛申込下さい。）

## 身延山山内文書調査報告書

中 尾 堯

この調査は、立正大学人文科学研究所が行う富士川流域総合調査の一環として、伊木寿一教授のもとで行ったものである。

富士川流域の寺院を研究対象とする場合、まず日蓮宗総本山身延山久遠寺に注目しなくてはならないが、その所蔵する史料は、中世に関する限り極めて乏しい。この時期の教団の動向を探索するには、中部、関東一円にわたる広汎な調査研究が要求される。